

教育実践報告

障がい者スポーツの理解推進を図る体験型教育実践の試み —松本市における中学生と大学生を対象にした取り組み—

矢野口 仁・小林 敏枝・加藤 彩乃・宮地 弘一郎・小島 哲也

Educational Practices Based on Experience to Facilitate Understanding of Adapted Sports:
Programs for Junior-high School and University Students in Matsumoto City

YANOKUCHI Hitoshi, KOBAYASHI Toshie, KATO Ayano, MIYAJI Koichiro,
and KOJIMA Tetsuya

要 旨

わが国の障害児・者が学校や地域でスポーツ活動に参加する機会は少なく、継続的にスポーツ活動を行うための環境は十分に整っていない。そのため、障がい者スポーツの理解推進、環境整備、活動や普及を支える人材育成が重要な課題となっている。著者らは、平成28年度長野県障がい者スポーツ普及振興事業の補助を受け、県内2カ所のモデル地区(松本市および長野市)の小・中学生と大学生を対象に、体験と交流を通して障がい者スポーツの理解推進を図る教育実践を行った。本報告は、補助事業の概要と成果、その後の松本市における取り組みについて報告し、今後の課題を指摘する。

キーワード

障がい者スポーツ 理解推進 体験型教育実践 松本市

目 次

- I. はじめに
- II. 次世代につなぐ障がい者スポーツの理解推進モデル事業
- III. 松本市における取り組み
- IV. おわりに

注

文献

I. はじめに

わが国では、障害児・者が学校や地域におけるスポーツ活動に参加できる機会は少なく、継続的にスポーツ活動を実施するための環境も十分に整っていない。そのため、学校や地域における障がい者スポーツの理解推進、環境整備、活動や普及を支える人材育成が重要な課題となっている¹⁾。

こうした現状を踏まえ、著者らは、平成28年度長野県障がい者スポーツ普及振興事業の補助を受け、県内2カ所のモデル地区(松本市および長野市)の小・中学生と大学生を対象に、体験と交流を通して障がい者スポーツの理解推進を図る教育実践を行った。本論文は、上記事業の実績報告書²⁾では詳しく紹介できなかった協力者(小・中学生、大学生、学校教員)のレポートや発言を資料として補足し、事業の概要と成果を報告する。併せて、事業後も松本市で継続して取り組んでいる教育実践の成果を紹介し、その意義と今後の障がい者スポーツの理解促進に求められる課題を指摘する。

II. 次世代につなぐ障がい者スポーツの理解推進モデル事業

1. 事業概要

平成28年度長野県障がい者スポーツ普及振興事業の補助を受けて実施した『次世代につなぐ障がい者スポーツの理解推進モデル事業』は、2016(平成28)年10月から2017(平成29)年2月までの期間、次世代を担う若者である小・中学生、卒業後は教壇に立つ可能性のある教職志望の大学生を対象に、県内2地区(長野市と松本市)で行われた。事業計画の立案、活動プログラムの企画運営、協力校・団体との調整連絡を行う実行委員会を、本論文の著者4名と橋本政晴氏(信州大学学術研究院教育学系・講師)の5名(代表・小島)で組織した^{注1)}。委員会メンバーは大学教員として障がい者スポーツあ

るいは特別支援教育の領域で研究に従事し、主に学校教員養成に関わる授業と実習を担当してきた。

交流・体験プログラムに採り入れた障がい者スポーツは、実行委員会メンバーが指導経験のあるフロアホッケー(知的障害)、障がい者シンクロナイズドスイミング(運動障害/知的障害)、車いすバスケットボール(運動障害)と、協力校の松本盲学校で活動が盛んなサウンドテーブルテニス(視覚障害)とフロアバレーボール(視覚障害)の計5種目であった^{注2,6)}。

2. 活動内容

1) 協力校・団体、特別講師

事業の趣旨に賛同して活動に参加協力した学校(以下、協力校)は、長野地区が長野市立吉田小学校1校(長野市)、松本地区が信州大学教育学部附属松本小学校(以下、附属松本小学校)、同附属松本中学校(以下、附属松本中学校)、長野県松本盲学校の3校(いずれも松本市)であった。また、信州大学教育学部(特別支援教育専攻学生、障がい者スポーツ関連授業受講生;長野市と松本市)、および清泉女学院短期大学(幼児教育科;長野市)の大学生が、実行委員会メンバーの担当授業またはボランティア活動の一環として参加し、小・中学生の活動を支援した。

体験・交流プログラムの企画運営にあたり、フロアホッケーチーム長野ゴシ隊ジュニア(長野県フロアホッケー連盟所属)、長野アップル水泳クラブ、信州大学車いすバスケットボール部セローズ、松本盲学校サウンドテーブルテニス部の各団体の協力を得た。また、小林稔氏(松本盲学校教員)、奥原明男氏(車いすバスケットボール元全日本代表チームメンバー)、箱山愛香氏(リオデジャネイロ夏季オリンピック大会シンクロナイズドスイミング全日本代表チームメンバー)の3氏を特別講師として招聘し、障がい者スポーツに関する体験・学習会、および講演会を開催した。

表1 体験・交流プログラムの概要(地区別)*

種目	活動日(回)	会場	協力校・団体/講師	大学生	内容
〈長野地区〉					
1 フロアホッケー	9～11月(2回)	信大教育学部附属特別支援学校体育館	長野ゴシ隊Jr.	信大教育学部1・2年生	大学生が、長野ゴシ隊Jr.選抜チームとの交流試合を行った。
2 フロアホッケー	10～11月(3回)	吉田小学校体育館 信大教育学部附属特別支援学校体育館	吉田小学校4年生 長野ゴシ隊Jr.	信大教育学部2年生	小学生が、担任、大学生、長野ゴシ隊Jr.メンバーら経験者に教わりながら初めてフロアホッケーを楽しんだ。
3 障がい者シンクロナイズトスイミング	11月19日	長野県障がい者福祉センター(サンアツプル)	長野アツプル水泳クラブ 講師・箱山愛香氏	清泉女学院短期大学生	大学生が、発表・競技会、箱山選手による模範演技と講演会を通して、障がい者スポーツとしての水中競技を体験した。
〈松本地区〉					
1 サウンドテーブルテニス	10～11月(5回)	松本盲学校体育館	松本盲学校	信大教育学部・他学部1年生	大学生が、松本盲学校卓球部生徒との交流、サウンドテーブルテニスの体験、校内のリニアアリーナ環境を見学した。
2 フロアホッケー	11月27日	松本歯科大学体育館	長野ゴシ隊Jr.	信大教育学部4年生	長野県の地区大会に長野ゴシ隊Jr.チームが参加し、2試合に大学生がチーム(ユニフォーム)の一員として参加した。
3 サウンドテーブルテニス /フロアバレーボール	12月(4回)	松本盲学校体育館	松本盲学校 附属松本中1、2年生	信大教育学部1年生	中学生が、盲学校を訪問し、校内見学と視覚障害者スポーツの体験をした。大学生は中学生の体験活動をサポートした。
4 視覚障害スポーツ	12月6日	信大附属松本中体育館	附属松本中3年生 講師・小林稔氏	—	中学生が、福祉仲間企画の小林氏(全盲)の講演会で、視覚障害スポーツや視覚障害者の日常生活などについて学んだ。
5 車いすバスケットボール	12月16日	信州大学体育館	附属松本中2年生 講師・奥原明男氏	信大車いすバスケットボール部員(セローズ)	中学生が、奥原氏の講演会と車いすバスケットの体験会を行った。大学生は中学生の車いす体験と競技体験をサポートした。
6 車いすバスケットボール	1月15日	信大附属松本小体育館	附属松本小3年生	信大車いすバスケットボール部員(セローズ)	小学生が、大学生アシリート(2016大学選手権優勝チームメンバー)による学習会と体験会を行った。

*平成28年度長野県障がい者普及振興事業実績報告書(「次世代につながる障がい者スポーツの理解推進モデル事業」代表・小高哲也)より転載【一部修正】

上記プログラムの実施にあたっては、子どもたちが障がい者スポーツを安全に体験でき、障害のある方々と楽しく交流できることを最優先した。また、通常の学校行事や授業活動に支障のない範囲で参加できるように配慮した。

2) 体験・交流プログラム

表1に体験・交流プログラムの概要を地区別に示した。長野地区では、9～11月に吉田小学校の4年生28名と信州大学教育学部2年生がフロアホッケーの体験と合同練習を行った。大学生は長野ゴシ隊ジュニアチームとの練習試合も行い、競技経験の豊富な同世代の知的障害アスリートとの交流を楽しんだ。11月に開催された第15回NAGANO障がい者シンクロナイズドスイミング発表会では、清泉女学院短期大学の学生が一般参加者向け体験プログラムの企画運営スタッフとして参加した。当日は箱山愛香氏による模範演技と講演会も行われた(図1～4)。

松本地区では、10～12月に松本盲学校体育館でサウンドテーブルテニスとフロアバレーボールの体験会が行われ、附属松本中学校1・2年生(延べ約160名)と信州大学学生が参加した。同期間に附属松本中学校では小林稔氏(松本盲学校教諭、全盲)の講演会「視覚障害者の生活とスポーツ」が行われ、3年生80名が参加した。11月に松本歯科大学で開催された第6回中信地区フロアホッケー交流大会には、信州大学学生が長野ゴシ隊ジュニアチームの一員として出場した。また、12～2月には信州大学セローズの学生が企画した車いすバスケットボールの体験会が行われ、附属松本小学校3年生(40名)と附属松本中学校2年生(40名)が参加した。中学生の体験会では奥原明男氏による技術指導と講演会が行われた(図5～11)。

3) 公開シンポジウム

2月上旬、事業の成果報告会を兼ねた公開シンポジウム『わたしたちが体験し学んだこと～障がい者スポーツの魅力と可能性～』が信州大学松本キャンパスで開催された。当日は一般の来場者約

〈長野地区体験交流プログラム〉



図1. フロアホッケー体験会(吉田小4年生)



図2. フロアホッケー体験会
(信州大学学生+長野ゴシ隊Jr.)



図3. 障がい者シンクロナイズドスイミング
発表会(一般参加者+清泉女学院短大生)



図4. 障がい者シンクロナイズドスイミング
発表会 講師・箱山愛香氏(右前)

25名のほか、信州大学生28名が会場スタッフとして運営に協力した。

シンポジウム前半は、実行委員会による事業概要の説明と活動報告の後、パネルディスカッション「障がい者スポーツを通しての学びと交流」が行われ、体験・交流プログラムに参加した小・中学生(松本地区)の代表8名とサポート教員3名、信

〈松本地区体験交流プログラム〉



図5. 松本盲学校見学(附属松本中2年生)



図6. サウンドテーブルテニス体験会(附属松本中2年生)



図7. フロアバレーボール体験会(附属松本中2年生)



図8. 第6回中信地区フロアホッケー交流大会(長野ゴシ隊Jr.+信州大学学生)



図9. サウンドテーブルテニス体験会(信州大学学生)



図10. 車いすバスケットボール体験会(附属松本中2年生)



図11. 車いすバスケットボール講演会(附属松本中2年生、講師・奥原明男氏)

表2-1 車いすバスケットボール体験会・奥原明男氏講演会の感想から
(信州大学教育学部附属松本中学校2年生)

<p>〈#1〉 そもそも車いすに乗ったのが初めてだったので、操作が難しかった。でも慣れていくと面白く、もっとやってみたいと思った。シュートを打つ、ドリブル、タックルは普通のバスケットとは感覚が違ってかなり難しかった。また、奥原さんのお話の中で、「自分で立てた目標は自力で精一杯やっていく」という言葉があり、自分も何があってもあきらめずに頑張っていきたいと思えた。</p>
<p>〈#2〉 ゴールがすごく上にあってシュートするのが大変でした。車いすバスケットの選手の方や好きな方も、始めは普通のバスケットとの違いや難しさを感じたのだろうなと思いました。落ちていたボールを拾うのもとても大変だったので、車いすの方が物を落として困っている時は拾ってあげたいなと思いました。</p>
<p>〈#3〉 車いすバスケットを初めてみたときは「簡単な？」と思ったけど、奥原先生のお話や実際の体験を通して、とても大変なスポーツだと分かりました。<u>体験を通して、障害のある人もない人もみんなが同じく関われるすごいスポーツだと思いました。また、スポーツだけでなく相手のことを考えて行動することの大切さが感じられました。</u></p>
<p>〈#4〉 車椅子を操作するのは思っていたよりも簡単でしたが、操作しながらボールをとったりシュートをするのはとても難しかったです。また、奥原さんのお話を聞いたりして、奥原さんにとって車いすバスケットはとても大切なものなんだなと思いました。何かを失っても自分で生きがいを感じるものがあれば、人生楽しそうだなと感じました。</p>
<p>〈#5〉 すごくためになる講演でした。怪我をしてから大きな影響になっていたのは“友だち”です。一つ一つの言葉が良くも悪くも心に積もって行って、これからのプラスにもマイナスにもなっていく。だからこそ、友だちの存在はすごく大事だと、この講演で本当に改めて思いました。そして、バスケットの楽しさを久しぶりに味わって、あきらめずにリハビリ頑張ろう、と素直に思いました。</p>
<p>〈#6〉 車椅子バスケットを体験して、思ったより力を入れなくても進んでいったし、ボールが高く上がらないからカットが簡単にできました。そして<u>何よりも奥原先生が2Cのバスケットの様子をみて楽しそうに笑っている姿が印象的でした。障害があってもなくても、バスケットを好きな人がいて、バスケットを楽しんでいる人がいて、そんなバスケットを通してまた一つつながりが増えたことがうれしかったです。</u></p>
<p>〈#7〉 (怪我のため)車いすバスケットを体験できなかったけれど、普通のバスケットと車いすバスケットの違いを学ぶことができた。もし自分がやったら、ボールを持ったまま車いすを動かしたりするのは絶対難しいし、やっぱり見えて難しそうだった。先生は16歳の時に事故にあって、私たちは今14歳で、なんだか複雑な思いになった。その中で、思いっきり楽しめるのは、すごいなあと思った。</p>
<p>〈#8〉 車いすバスケットについてだけでなく、それ以上の、人生について考えさせられることまで学んだような気がします。車いす生活になってもう死にたいとまで考えていたところを、叱れる友だちがいるだなんて。とても衝撃的だったし、とても感動した。そんな友だちを私は人生の中でもつことができるだろうかと思いました。</p>
<p>〈#9〉 まず、信大体育館へ行って驚いたのが、私たちと同じ健常者の方がプレーしているということ。でも自分でやってみると難しいけど、とても楽しくて、障害のある方だけのスポーツではないんだなということを感じることができました。そして、こうして<u>様々なスポーツが健常者だけでなく障害のある方でもできるようにアレンジされているのはとてもいいと思ったし、そういうスポーツで生きる道を見つけたらという人も、奥原さんのようにたくさんいると思うから、どんどん増えてほしいと思いました。</u></p>
<p>〈#10〉 車いすバスケットを生まれて初めて経験してみて、思ったよりうまく車いすを動かせたが、それに加えボールを使うという、二つの動作を同時にやるみたいなのが難しかった。奥原先生が言っていたように、友だちと協力したり、助け合うということは、どのような立場にあっても必要だと改めて思った。体験を通し、人生に必要なことを多く見付けられる、いい体験学習だった。</p>

〈注〉斜体に下線の箇所は本文中に引用

州大学学生3名がパネリストとして登壇した。遠方のため公開シンポジウムに出席できなかった吉田小学校の児童は当日の会場へビデオメッセージを届けてくれた。休憩時間には別会場で記録写真と小・中学生の感想メッセージのパネル展示が行われた。シンポジウム後半は、『スポーツをきっかけとした体験・交流に参画して』というテーマでサポート教員ほか学校関係者によるコメント発表、フロア参加者を交えた意見交換が行われた。

3. 事業成果と課題

1) 体験を通して感じたこと、学んだこと

松本地区の体験交流プログラムに参加した附属松本中学校2年生が書いた感想文の一部を表2-1に示した。彼らは車いすバスケットボールを体験会で初めて経験し、同じ会場で奥原氏の熱い講演に耳を傾けた。文中の記述を抜粋して以下に紹介する；

『体験を通して、障害のある人もない人もみんなが同じく関わられるすごいスポーツだと思いました。また、スポーツだけでなく相手のことを考えて行動することの大切さを感じられました。』(#3)

『何よりも奥原先生が2Cのバスケの様子をみて楽しそうに笑っている姿が印象的でした。障害があってもなくても、バスケを好きな人がいて、バスケを楽しんでいる人がいて、そんなバスケを通してまた一つつながりが増えたことがうれしかったです。』(#6)

『様々なスポーツが健常者だけでなく障害のある方でもできるようにアレンジされているのはとてもいいと思ったし、そういうスポーツで生きる道を見つけれられたという人も、奥原さんのようにたくさんいると思うから、どんどん増えていってほしいと思いました。』(#9)

同じ附属松本中学校の3年生は、小林稔氏の講演に参加し、視覚障害(全盲)者の生活と障がい者スポーツに関する様々な話題に接することができた。表2-2は彼らの感想文である。先の例と同様、文中の記述を抜粋して以下に紹介する。

『小林先生が「困っている人を見つけたら声をかけてほしい」、また、IT機器や音声ガイドや商品、街のバリアフリー化が進んだとしても「一番安心できるのは人の支えです」と語っていらしたのを聴いて、少し声をかける勇気が出てきました。』(#1)

『今まで私の知らなかったことをたくさん知ることができました。…(中略)…目が不自由だとスポーツは上手くできないものだと思っていたけれど、サポートする人がつくことによってとてもやりやすくなるんだなと思いました。』(#5)

『「目が見えない」ということは想像するだけなら易しいことだと思います。…(中略)…「不幸」ではなく「不便」ととらえるという考え方は、自分の不利な点を前向きに考えているようで、すごいことだと思うと同時に、私の生活態度や考え方にも活かしていけるのではないかと、そう思いました。』(#7)

どの文章も、中学生らしい素直な感情、驚きや発見が率直な言葉で表現されていて、一人ひとりの思いがよく伝わってくる。それは、彼らが障がい者スポーツを実際に体験し、当事者の話を身近に聞くことで、自分自身の日常の経験や出来事を振り返り、そこから「障がい者」の生活、「障がい」とその「文化」に思いを馳せ、理解を深めているからではないだろうか。

なお、本事業の成果発表会を兼ねて開催した公開シンポジウムは、特別支援学校や支援学級の教員、地域のスポーツ指導者等へ、障がい者スポーツの種目や指導方法等を紹介する良い機会になったと思われる。また、小・中学生や大学生による

表2-2 小林稔氏(松本盲学校教員)講演会の感想から

(信州大学教育学部附属松本中学校3年生)

<p>〈#1〉 登下校中など、白杖を使って歩く人を見かけることがありましたが、その人が少し困っているように見えても、「逆に迷惑かな」「勇気が出ないな」と思って、声をかけることができませんでした。ですが、<u>小林先生が「困っている人を見つけたら声をかけてほしい」また、IT機器や音声ガイドや商品、街のバリアフリー化が進んだとしても、「一番安心できるのは人の支えです」と語っていらしたのを聞いて、少し声をかける勇気が出てきました。</u></p>
<p>〈#2〉 世の中には、小林先生のように目が不自由な方もいれば、耳、身体が不自由な人、お年寄りや赤ちゃん、言葉の不自由な外国人など、様々な立場の方がいます。全員が平等に学べ、語り合え、身体を動かせる「心のバリアフリー」の世界を実現させるために、自分ができることを考えていきたいです。</p>
<p>〈#3〉 正直、講演会の前までは、私は障がい者と健常者の間に少しだけ超えがたい壁を感じていました。しかし、講演会を終えた今、私の気持ちは変わりました。一番強く感じたことは、障がい者だけ特別というわけではなく、障がい者も健常者も皆が同じこと、ものを体感し、共有することができるということです。決して差別したりするのではなく、お互いに歩み寄って理解し合いながら生きていくことがとても大切だと思いました。</p>
<p>〈#4〉 以前、盲導犬を連れて買い物をしている人を見たことがあります。今回、先生の話を含めて、目が悪い人でも、見える人と同じようなスポーツや生活ができるように、たくさんの工夫がされていると思いました。同じように目が悪くならないと先生の立場を理解することはできませんが、話している先生の姿はとても輝いて見えました。紹介して下さったスポーツは、とてもおもしろそうだと感じました。また、最後に話して下さった「全力でやりきる」ということを常に意識していきたいと思います。</p>
<p>〈#5〉 <u>今まで私の知らなかったことをたくさん知ることができました。目が不自由というのはあまり分からなくて、深く考えようとも思ってもいなかったけど、講演を聴いて、困っていそうなときは声をかけることや、点字ブロックの上に物を置かないなど、もっと日々意識しなきゃいけないことがたくさんあると思いました。また、目が不自由でもたくさんのスポーツができるんだなと思いました。目が不自由だとスポーツは上手くできないものだと思っていたけれど、サポートする人がつくことによってとてもやりやすくなるんだなと思いました。</u></p>
<p>〈#6〉 私の家の近くでも、目の見えない方をよく見かけます。その人は白杖を使って歩いています。私はその人を見ると、「きっとこの道を歩くのが初めてだったとき、不安だったんだろうな」と思いました。それでも、現在はまるで目が見えているかのように真っ直ぐ歩いている姿を見かけると、「やっぱり諦めてはいけない。繰り返すのみなんだな」と感じます。今日の講演では「失敗したから諦めるのではなく、失敗をしたからもう一度チャレンジしてみる」ということを学びました。どんなに辛くても、その後はきっとよいことがたくさん待っているんだと思えば、何度でもいろんなことにチャレンジできると思います。</p>
<p>〈#7〉 <u>「目が見えない」ということは想像するだけなら易しいことだと思います。しかし、自分が実際に目を閉じて歩いてみれば、その難しさや不便さというのは、とても大きいものだと分かります。小林先生のお話にあったような「不幸」ではなく「不便」ととらえるという考え方は、自分の不利な点を前向きに考えているようで、すごいことだと思うと同時に、私の生活態度や考え方にも活かしていけるのではないか、そう思いました。</u></p>
<p>〈#8〉 小林先生は、視力を失ってからも自分にできることを探し、自分の夢、目標をもっていたので、今こうして生き生きとしているのだと思いました。もし、僕が同じ立場だったら、やる気を失い、外に出ることに対して億劫になり、行動しなかったと思います。なので、行動できた小林先生を心から尊敬します。先生を見習い、何か壁にぶつかったら、諦めずにやってみることを大切にしたいと思いました。</p>

〈注〉斜体に下線の箇所は本文中に引用

意見発表、感想文と記録写真のパネル展示は、事業に直接参加できなかった方々にも障がい者スポーツの魅力をも十分に伝えることができたはずである。

2) 今後の課題

上記の成果を踏まえ、実績報告書において、今後の取り組みに必要な課題として以下の3点を指摘した。

第1に、今回の事業は協力校を長野市内の小学校1校、松本市内の小学校、中学校、特別支援学校各1校の計4校に限定して行われたため、他地域の学校や複数の学校間での交流や学習の機会をつくることができなかった。次年度以降も同様の事業が継続されるならば、より多くの地域・学校へ取り組みが拡大されること、今回の協力校が理解推進のモデル校として一定の先導的役割を果たすことが求められる。

第2に、大学生の大半は実行委員会メンバーが担当する授業や地域活動の一環として本事業に参加した。今後は、大学のカリキュラムと連動した障がい者スポーツの実習授業、障がい者関連の地域交流活動が体系的プログラムとして学生に提供され、実践されることが必要と思われる。

第3に、実行委員会メンバーである大学教員の責務でもあるが、本事業の成果が公表され他府県や外部識者の意見評価を収集すること、それを踏まえて今後の取り組みに向けた具体的な方策を明らかにすることが求められる。

Ⅲ. 松本市における取り組み

本項では、補助事業の後も松本市内(松本盲学校、附属松本中学校、信州大学)で継続して行われている教育実践の取り組みを紹介し、これまでの成果と今後の課題を指摘する。

1. 松本盲学校と附属松本中学校の取り組み：視覚障害スポーツの体験と交流・共同学習

補助事業の課題として「今回の協力校が理解推進のモデル校として一定の先導的役割を果たすこと」が指摘された。この課題に関わって、協力校として事業に参加した松本盲学校と附属松本中学校が共同で取り組んでいる教育実践を以下に紹介する。

1) 視覚障害理解研修

2016(平成28)年度の補助事業が双方で充実感をもって終了した後、両校の希望により翌年度も活動が継続され、生徒や教職員の交流が毎年行われてきた。2018(平成30)年度は、附属中学校の2年生4クラスが松本盲学校を訪問し、各クラスでサウンドテーブルテニスなどの視覚障害スポーツ体験と「視覚障害理解研修」を実施した。

サウンドテーブルテニスの体験を担当した教員が全国視覚障害者卓球大会の優勝経験者でもあり、研修会では、その体験談を通じて、「楽しむスポーツ」という側面とともに「競技するスポーツ」「競技者としての視覚障害者」という側面を伝えることができた。また、視覚障害者、特に全盲生が、スポーツの支えとなる身体感覚や空間感覚をいかに身につけるか、全盲生が感じたことを明確に意識化するためには言葉が重要な役割を果たしていることなど³⁾、実際の体験をもとに学びを深めることができたと思われる。

2) 交流・共同学習を支えているもの

松本盲学校と附属松本中学校の交流・共同学習が継続して行われるようになった理由として、それぞれの学校で現れた次のような変化を挙げることができる。

一つ目は、附属松本中学校の年間指導計画への位置づけである。両校の交流、特に中学校が校外に出るには事前の打ち合わせから計画書の提出まで多くの労力が必要である。それにも関わらず継

続できたのは、補助事業の成果が生徒の声や姿に現れ、事業の意義が実感できたとともに、学校が作成する年間指導計画に事業が位置づけられ、教職員と生徒が見通しを持って準備・実践できるようになったことが大きい。

二つ目は、盲学校の受け入れ態勢がしっかりしてきたことである。補助事業の年度は、中学生が来校する時間に都合がつく教職員と生徒が集まって対応していたが、2年目以降は自立活動担当教員の増員により外部対応できる教員が増え、組織だって対応できるようになった。

三つ目には、そのような組織的な動きを通して交流に関する教職員の専門性が向上したことが挙げられる。盲学校では当初は学校が行っていることを紹介するだけであったが、授業後の感想をレポートにして届けてもらうことで中学生の知識や疑問、知りたい内容を把握し、研修に反映させられるようになった。このことは附属松本中学校にも当てはまり、交流・共同学習における双方の指導技能の向上が次の活動への意欲を高めたはずである。

上記の成果は、2019(平成31)年度に松本大学教育学部3年生(特別支援教育コース授業「視覚障害児教育概論」受講生33名)を盲学校で受け入れ、学校教員養成のための視覚障害理解研修を行った実績にも繋がっている(図12・13)。



図12. 視覚障害理解研修：見えない人に空間の情報をどのように伝えるか(松本大学教育学部3年生)



図13. 視覚障害理解研修：身体の動きを言葉で伝えることの難しさを知る(松本大学教育学部3年生)

3)盲学校における視覚障害スポーツの推進と今後の課題

盲学校では、視覚障害のある子どもたち(幼児・児童・生徒；以下、生徒)が安全で楽しく体を動かすことができるように、また、旺盛な運動欲求を満たしたり競技の楽しさを味わえたりできるように、スポーツに関して様々な介助法や種目が考案されてきた。その種類は徒競走、球技、水泳、武道から登山、ウィンタースポーツ等に至るまで幅広い⁴⁾、^{注7-9)}。

競技に打ち込む生徒の中には本格的な練習環境が必要になる者もいるため、松本盲学校では市内にある信州大学や松本大学の施設設備(全天候型トラックなど)の借用、コーチングの依頼を学校で行うこともある。また、在学中に様々なスポーツと出会った生徒が卒業後も継続的に取り組めるよう、可能な限り学校施設を開放することで彼らを支援している^{注10)}。

卒業後も継続してスポーツに取り組むことについて卒業生に話を聞くと、「スポーツをすることによる達成感、爽快感」、「仲間との連帯感」などプラスの評価が多く、「健康の維持増進のためにも役立っている」という感想も多い。しかし、その一方で「新しい仲間がなかなか増えない」、「練習や試合が行える場所を確保するのが難しい」、「移

動に手間と時間がかかる」などが課題として挙げられた。

「新しい仲間がなかなか増えない」という問題については、盲学校における部活動参加率の低下(停滞)の実情からも頷けるものがある。松本市を含む中信地区で障がい者スポーツの理解啓発に取り組んでいる担当者も、「企画はすれど当事者の参加が増えない現状があり、その原因を知りたい」と語っている。この点については、障害者(及び保護者)のニーズと社会的支援の両面から検討し、何らかの改善策を見つける必要があるだろう。

2. 信州大学の取り組み：大学生はいかに体験し、そこから何を学ぶのか

補助事業の課題として、「大学のカリキュラムと連動した障がい者スポーツの実習授業、障害者関連の地域交流活動が体系的プログラムとして学生に提供され、実践されること」が指摘された。本項では、著者の加藤が信州大学全学教育機構(松本市)で行っている授業実践の内容を紹介する。

1) 授業実践の背景にあるもの

障害理解の発達について徳田ら⁵⁾は、障害や障害者に気づくという段階から、障害者が社会集団に参加することを受容し、自然と援助行動が出現するという段階まで5つの段階があると示している。また、中村⁶⁾は、障害に関する知見に加え、自己と障害のある他者との関わりの中で障害を捉え、「自己」「他者」「知見」による理解の重なる部分が障害理解だと述べている。

これらのことから、学生にとって重要な学びとは、単に知識として“運動障害発生の原因と生活上の困難さ”について知っているだけではなく、それら“も”知った上で『障害のある人とどのようにコミュニケーションを取り、関わるができるのか』と思考し実践を重ねることであると捉えることができる。この考えを基に、信州大学では、1

年次の一般教養科目の中で『しょうがいスポーツゼミ』と『アダプテッドスポーツ』という授業を実施している。

2) しょうがいスポーツゼミについて

本授業は、障害や障がい者スポーツに関する講義と、学びを生かした障害者とのスポーツ実習を通して、「障害とは何か」、「共生社会とはどのような社会で、いかに形成していくのか」と考え行動できる素地を身につけることを目的としている。この授業は、2005年に長野県で開催された知的障害のある人を対象とした『スペシャルオリンピックス』冬季世界大会への学生ボランティア派遣を目指して開講された「スペシャルオリンピックスで学ぼうゼミ(2004年～2016年)」を前身に持っている。市内の障がい者スポーツ活動団体や特別支援学校などと交流・連携を行い、少しずつ形を変えながら現在に至っている。

受講生は、教員や福祉機器の開発者を目指すなど、将来の職業とつながっている学生や、身内や友だちに障害者がいたため興味のある授業だったという学生、「あえて機会を作らないと障害者と関わることがないから」という学生もいる。つまり、障害について考えることや障害者と関わることに、比較的身近なテーマとして捉えている学生と、それらを特別な事柄として捉えている学生が混在している学習集団と言えよう。

このような学習集団における学習の評価は、知識の量やその質ではなく、障害のある人とのスポーツ活動場面において、様々な心身の状態やコミュニケーション特性のある人それぞれに合わせてコミュニケーションを取ることができるか、という視点で行っている。そのため、授業時間外で3回の実習参加とその振り返りを特に重視しており、各実習後は、どのような人と関わったのか、関わる際に意識した点、関わり方の成功点と課題等についてレポートを課している⁷⁾。

学生からの気づきや疑問、不安な点などは、一人の経験として終えるのではなく、次の授業で

のディスカッションテーマとしている。成功体験については、なぜ成功につながったのか、失敗体験や課題については、なぜそのようになってしまったのか、どのように対応するのが良かったのかなどについて思考し、共有することで次の実習に生かすことができるのである。この取り組みにより、人と関わる際に必要となる、相手の考えや行動を読み取るためのチャンネルを増やすことや、多様な方法でのコミュニケーション手段について各学生が学ぶことができると考えている。

3) アダプテッドスポーツについて

本授業は、障害の有無や年齢、体力の程度に関わらず、あらゆる状態でもスポーツを楽しむことができるように、学生自身が新たにスポーツを考案したり、楽しむ対象に合わせて用具やルールを工夫したりする、創造型の体育授業である。障害や障害者のスポーツの理解に留まるのではなく主体的に想像・創造することで、分野に関わらず社会に対して何かしらの実践ができる思考力と行動力を身につけることを目指している。

受講生は前述の授業と同じく、将来の職業と結びつきがあると感じている者もいるが、一般的なスポーツ種目の実施に苦手さを感じている者もいる。特に運動が苦手な学生は、アダプテッド＝適応させる、という「その人に合わせて行うスポーツ」というテーマに魅力を感じているようである。

授業では、まず、シッティングバレーボール(下肢障害)やブラインドサッカー(視覚障害)などの障がい者スポーツの紹介や体験を行うことで、障害のある人もスポーツを行っていることを知り、そのスポーツは(障害のない)自分も楽しめるものであると感じられるようにしている。その上で、誰もが楽しめるスポーツを受講生自ら考案する中で、スポーツをする多様な対象を想定することや、用具を工夫することを行いスポーツの新たな楽しさや可能性を見つけられるようになることを目指している。各グループが考案したスポーツは、相互に体験し、「ネーミングセンス」「対象の想定」

「ルールのわかりやすさ」「スポーツの面白さ」「インクルーシブ(誰もが一緒に楽しめるスポーツであるかどうか)」「安全面への配慮」の6つの観点で評価し合うようにしている。

図14の写真は、視覚障害のある人も楽しめるように工夫したボール運びリレーを発表した場面である。他のグループからは、「視覚障害の特性を考慮し、点字ブロックを起き足で道順を探る方法や、障害物を高くしてわかりやすくすると良い」という意見や、「2人で協力してボールを運ぶことで自然とコミュニケーションが活発になるという要素が面白い」といった意見が出された。考案者自身も紹介し評価してもらうことで、工夫や配慮が十分であったかどうかについて確認することができる仕組みである。

これらの授業を受けた学生のうち何人かは、授業課題とは別に、障害者の日常スポーツ活動や大会ボランティアへの参加を継続しており、自身の生活において、障害者との関わりや障害者とのスポーツ実施がより身近になった者もいることがうかがえる。2017年から2019年の実績では、のべ35名の学生が、『長野車いすマラソン大会(第13回～第15回)』や『第17回全国障害者スポーツ大会グランドソフトボール競技地域予選会兼第44回北信越グランドソフトボール大会』の運営補助を行い、1名の学生は県内のブラインドサッカー協会運営スタッフとして継続介入している。また、任意団体ではあるが、野外でのインクルーシブスポーツイベントの企画運営をする学生組織も出来上がり、学年が変わりキャンパスを移動した後もイベントがある度に集まる熱心な学生も増えてきている(図15)。現在、教育学部に所属する2年生4名を中心に、障害のある子どもと家族と一緒に挑戦する新たな夏のスポーツイベントを計画中である。

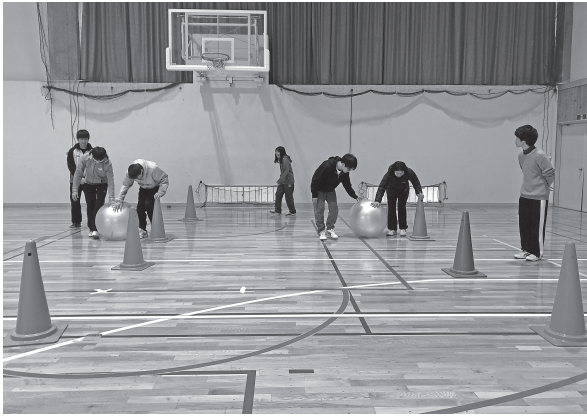


図14. 学生考案スポーツ『キャリレー』



図15. 障害の有無に関わらず家族や仲間と自然の中でユニバーサルロゲイングー

4) 今後の課題にかえて

「どうしてこんなに楽しく話せる友達との間に障害者と健常者という線引きをしなければならぬのだろう」という違和感を強く感じました。これは前期のしょうがいスポーツゼミや前回の秋のユニバーサルフェスでも感じたことであり、自分の中で「障害」というものに対する考え方が変わってきている証拠だと思います。そして、障害者を「障害者」として捉えるこの社会がどうしたら変わるのか、その道を模索したいです。

これは、インクルーシブイベントに参加した学生の感想である。彼のコメントは、「障害者」と関わるのではなく、「その人」とどのように関わるのが重要であること示しており、人と関わる際にまず大切なことは、障害に関する知識ではな

いと改めて意識させられるものである。今後も、このような感覚を持った学生を育てられるように授業実践を重ねて行きたい。

IV. おわりに

今夏、東京で同時開催される2020オリンピック・パラリンピック大会が間近に迫る中、障害者への理解促進と共生社会の実現に向けた機運がこれまで以上に高まっている。パラリンピックはもとより、障がい者スポーツを通じた取り組みは様々な内容を包含するものであり、多種多様な学びのテーマを含む。その学びは、様々な人が持てる力で活動する可能性を広げ、共に活躍する機運を作ることにより、将来の共生社会へとつながる⁸⁾。

今回、われわれが障がい者スポーツの理解推進を図るため、県内2地区(長野市と松本市)の小・中学生と大学生を対象にして行った体験型教育実践の試み、その後の松本市における継続した取り組みは、現時点で一定の成果を得ることができたように思われる。しかし、それが若者たちの将来の共生社会につながるのか、残念ながら確信はない。

『松本盲学校との交流・共同学習による生徒たちの学びや意識の変化を、先生方はどのように見守り、評価されているのでしょうか?』 私たちの問いかけに、附属松本中学校の教員の一人が次のように語ってくれた。以下に引用して稿を閉じる。

『…(今回の体験を通して)相手がどんな困難を抱えているのか、どんな喜びを感じているのか、また自分とは異なる相手と共に生きていくためには自分がどう対応すればいいのか、その一端を正しく知ることができた生徒が多くいたように感じます。

…(中略)相手の物差しに合わせてやってみる、考えてみるということ、つまり、相手のことを知ることを学ぶことができたのだと思います。相手の人がどんな人で、どんな状況で、どんなことを考えているのか。それを知

ることで、見えたり、感じたりする世界は大きく変わる。そのことを、全ての生徒が、その子なりに実感していたのではないのでしょうか。

体験学習を大切に積み重ね、障害のある方や高齢者、また身近な友達のことを、なるべく正しく知ってほしい、知ろうとしてほしい。私はそう強く願っています。』

謝辞

平成28年度長野県障がい者スポーツ普及振興事業の補助を受けて行われた『次世代につなぐ障がい者スポーツの理解推進モデル事業』は、公益財団法人長野県障がい者スポーツ協会、協力校ほか学校関係者、関係団体、その他多くの皆様からご支援ご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

付記

本稿における写真の掲載、感想文と発言の引用については、学校および関係者の許諾を得ています。

注

- 注1 筆頭著者の矢野口は松本盲学校校長(当時)の立場から、視覚障害スポーツに関わる内容と松本地区活動プログラム全般について、事業期間を通して実行委員会へ助言協力を行った。(2019年4月より現職)
- 注2 フロアホッケーは、アイスリンクのできない地域でもできるようにとスペシャルオリンピックスがルールを独自に考案して生まれた冬季の公式スポーツ競技。直径20cmの穴の空いた「パック」を「スティック」で操り、相手側のゴールに入れる。⁹⁾
- 注3 障がい者シンクロナイズドスイミング(現在の名称はパラアーティスティックスイミング)は、障害者の「もっと泳げるようになりたい」「いろいろな泳ぎができるようになりたい」という願いの中から生まれた水中スポーツ。¹⁰⁾
- 注4 車いすバスケットボールは、コートの大さきやゴールの高さなど、基本的には一般のバスケットボールと同じルールが適用される。回転性や敏捷性、あるいは高さが得られる専用の車いすを使用するが、ボールを持ったまま2回(プッシュ)まで漕ぐことが認められている。¹¹⁾
- 注5 サウンドテーブルテニスは、専用の卓球台の上で、ネット下3cmほどの隙間を通して鉛の粒が入ったボールをラケットで打ち合う。
- 注6 フロアバレーボールは、全盲や弱視の視覚障害者と健常者が一緒にプレイできるように考案された球技。床上でネット下30cmの隙間を通してバレーボールを打ち合う。
- 注7 陸上競技では、音響走(ゴール付近で発する音や、前走する教員が鳴らす鈴の音や手叩きの音を頼りに走る短距離走)、円周走(グラウンドの中心付近に一方を固定された長いワイヤーのもう一方を握って円周部分を走る中短距離走)などがある。
- 注8 球技では、フロアバレーボール、サウンドテーブルテニスのほか、グラウンドソフトボール(全盲のピッチャーがハンドボールに使うボールを転がして投げ、それをバッターがバットで打ち返す)などがよく知られている。パラリンピック種目であるゴールボールやブラインドサッカーも全国の盲学校へ徐々に広がってきている。
- 注9 他の特別支援学校と同様、近年の盲学校は重複障害生の割合が高くなり、重複する障害も重度化している。また、中途視覚障害で入学してくる成人生徒の中には全身疾患のため通常の運動が難しい者が少なくない。そのため、過度の負担なく運動を楽しめるよう、マレットゴルフやフライングディスク等を改良した学校独自の種目も考案されている。
- 注10 松本盲学校では、グラウンドソフトボールやフロアバレーボールの社会人チーム、サウンドテーブルテニスのサークル、ウォーキングやマラソンの伴走・伴歩者を育てるサークルには、校庭、体育館などの施設や備品を積極的に貸し出し

てきた。

文献

- 1) 文部科学省, 「地域における障害者スポーツの普及促進について」(2016)
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/002_index/toushin/(閲覧日2018.8.21)
- 2) 小島哲也, 障がい者スポーツ普及振興事業支援金実績報告書「次世代につなぐ障がい者スポーツの理解推進モデル事業」, (2017) [未公開]
- 3) 全国盲学校長会(編著), 『見えない・見えにくい子供のための歩行指導Q & A』ジアース教育新社(2016)
- 4) 全国盲学校長会(編著), 『視覚障害教育入門Q & A新訂版』ジアース教育新社(2018)
- 5) 徳田克己, 水野智美障害理解一心のバリアフリーの理論と実践一, 誠信書房(2005)
- 6) 中村義行, 障害理解の視点—「知見」と「かかわり」から—, 佛教大学教育学部学会紀要, 第10号, pp.1-10.(2011)
- 7) 加藤彩乃, 障害者スポーツ体験や障害者との交流による障害者理解の深まり—他者との気づきや学びの共有を通じて—, 長野体育学会第52回大会研究発表抄録集, p.58.(2017)
- 8) 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会, 東京2020アクション&レガシープラン2017(2017)
<https://tokyo2020.org/jp/games/legacy/items/legacy-report2017.pdf>(閲覧日2019.10.13)
- 9) <http://w2.avis.ne.jp/fhjapan/about.html>
 (閲覧日2019.12.10)
- 10) <http://web.kyoto-inet.or.jp/people/spo-shin/sinkuro/toha.htm>(閲覧日2019.12.10)
- 11) <https://tokyo2020.org/jp/games/sport/paralympic/wheelchair-basketball/> (閲覧 日 2019.12.10)